

雲の上の菊

土田龍太郎

一、

そも菊の花としては、露おくごとに色は變はれどとみにも枯れ萎れず、かへりていとど輝りまさりゆきてさながら一年に二たび匂ふばかりにもおぼゆれば、うつろひさかりとも云ひて昔より人の命の長きに擬へきたれるはむべことわりなり。かの櫻の花の咲くと見てかつ散るいさぎよきといたくたがへるはさてもこそあれ、この菊の花またいともあてにめでたしといはでやはあらむ。

天武天皇十四年九月甲辰朔壬子に宴ありしこと記せれど、類聚國史によりてこれを本朝の重陽節の濫觴とすべし。重陽の宴には群臣菊花酒を賜はり菊に因める詩賦を奉るを習ひとせしかば、これを菊花の宴とも呼びならはしたり。

加波良與毛木といへる和名なきにあらねど、菊の唐土より渡り來れる花なることさらに疑ひなし。もと異國のものなればにや、この花を大和歌に詠むためしさしも古からず。萬葉集をけみするに菊の花とはいまだ一首だに見えず。

古今集秋下には、菊を詠める歌十三首を列ね載せたり。いづれおもしろきはさることなれども、今いささか心とめて勘へまほしきは藤原敏行のものせる一首にぞある。この敏行かの在五中將のあひ婿にてその名伊勢物語にも見えたり。司位の經上りしさま滞れるあととてはことに認めがたくて、從四位下兵衛督になりて後にみまかりたれど、歌人のほまれなべてならず、敕撰集に入れる詠草すべて二十九首に及べり。ことに世に弘く知られぬるは

住の江の岸による波夜さへや云々

また

秋來ぬと目にはさやかに見えねども云々

などなるべし。

敏行の詠める菊の花の歌の古今集に入れるは

久方の雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

てふ一首なれど、寛平の御代にこれを詠みまゐらせしとき、敏行いまだ殿上ゆるされざりけれどわけて召しあげられて仕うまつれるむね詞書には記せり。

この歌ひとたび敏行の口より出づるや、ただ時のほまれをとりしのみならで代々を経へ歌人の愛できたれるさまあらあら辿るをうべし。さるは寛弘のころ藤原公任の撰びし和漢朗詠集、菊てふ題の下にはまづ六漢詩句を列ねたれど、ただに續けて載せたる大和歌としては、

凡河内躬恆の

心あてにをらばやをらむ云々

また右に引けりし敏行の

ひさかたの雲のうへにて云々

の兩首にほかなし。また三十六歌仙といふこと同じ公任卿のものせし三十六人撰に始まれるなれど、歌仙に名を列ねたる敏行の同じ菊の一首、またこの歌集に入りさらに後れて成りし俊成卿の三十六人歌合にも載りたり。

世下りて伏見院の御代に藤原長清の撰いづはくびし夫木和歌抄に菊を詠める歌百三十首あまり列ねたれど、そが中に敏行の右の一首を本歌とせりとおぼしきものここかしこに見えたり。

民部卿爲家

ちはやぶるかむがき山の白菊は

天照神の星かとぞ見る

權大納言實家卿

星とのみまがひし菊はむらさきに

うつろふのちぞ雲と見えける

清輔朝臣

むらさきの雲間の星と見えつるや

うつろひのこる白菊の花

隆祐朝臣

かささぎのわたさぬほしのあたりまで

ほしか河邊の白菊の花

法印公譽きんよ

これよりやあまの川せにつづくらん

星かと思ゆる菊のたかはま

ことにめでたきは末に引ける公譽法印の一首にて、ここに敏行の歌のおもむきを伊勢物語古今集に載れる

狩りくらししたなばたつめに宿からむ

天の河原にわれは來にけり

てふ業平の歌の意にかよはせてたひらかに詠み下せるわざの巧みなることげにたぐひなし。おぼろけの歌讀みのえまねぶべきさかひにはあらず。

二、

内裏を雲居と云ひ上達部殿上人を月卿雲客と呼ぶは古き世よりの習ひにて知らぬ人としてあるべからず。げに帝のつねに住まひたまふ九重の内、たふときことよなければ、おのづから雲の上にも比べらるるはさることなれども、かしこに咲ける菊の花さへもやがて夜の星に見まがはるることまことにありやなしや、いぶかしきかたたえてなしとしも云ひがたし。

宇多院の仰せにまかせて歌まゐらせしとき、敏行の目には殿上の菊の花の匂へる様うつつに空の星に見まがふほどなりしや、はたまたただ雲居の花といふばかりをよすがにて菊を星に見たてつつとりもあへず一首ものしたるのみなりや、このことせめて一たびは考へみではあるまじ。

もしこの歌、ただ生れつきたる才覺にまかせてうちつけに口より出でし一首なりとせば、心とき方はさてもこそあれ、つひに當座の譽れをとりしばかりのかりそめの戯れにすぎねば、さまで秀れたりとはをさをさ云ひがたからまし。

されど今こころみに、この花咲きて後にさらに花なしてふ白樂天詩句の意にそひて思ひめぐらせば、霜のはや降りそめてよろづ冴えわたるころ、花としてはただ菊のみ残りてきはことに麗はしく厳くしきさま、しばしこの世のものならずおぼゆることたえてなきにしもあらじ。

また承和の帝の好ませたまひしそが菊のことを古き歌に、しげみさえだの花のてこらさと謳ひたれど、このてこらさなる言そもなにを指せるやらむはつまびらかならず。唐國より渡り來れる菊の花の、わが國にもとより生へる花にはなかなかありがたきけやけきさまを褒めたるにてもやあるべき。

かく考へもてゆけば、敏行の歌よしありげにて、ただかりそめのたはむれとはむげに贋むべからず。雲居の崇きを仰ぎ菊の花の麗しきを賞むるひたぶる心にまかせておのづと口より出でし一首なりと見なさむこそいとまことしきなれ。

三、

おのれいまだ若かりしほど、菊にはさしも心とめず、ましてその花を空の星によそへむことあるべくもあらざりけり。しかるにやうやく七十路に入りぬるころより、敏行の菊の歌の心にかかるをりをりなきにしもあらずなりぬるは、さすが齡重ねしかひにてもあるべし。そぞろ歩きの道のべにわが宿近きあたりに住む人の家の前栽の中にたまさかに目とまる菊の花のいとも匂ひ照りはえきはやかにめでたくおぼゆることあり。いかにうるはしくとも晝日中に立てる菊のさながら夜空の星かとおどろかるるまでのことこそきがあるべからね、敏行の歌のおもむきのふと心に落ち入る刹那のなきにあらぬぞいともくすしき。げに敏行

の菊の一首、あさからぬ情のこもれることなほざりならず、世々の歌人のめできたりしはさ
ることにて、いかさまこれを秀歌と云はむとも誤りなかるべし。

(令和七年三月二十七日受附)